論　文

# 現代ギリシア語との対照における アルバニア語の名詞定形の研究

井浦　伊知郎

## 1. 序

### 1.1. バルカン諸語における「定」「不定」の形式

バルカン半島の主要言語には、名詞の定（definite）形[1]を示す場合に大別して、名詞に前置する定冠詞（および不定冠詞）を用いるものと、名詞の語尾に直接後置され名詞屈折の一部を成す定形語尾（definite suffix）（Newmark et.al. 1980: 6ff.）[2]を用いるものとがある。第一のグループには現代ギリシア語、第二のグループにはアルバニア語、ブルガリア語、マケドニア語、そしてルーマニア語が属している。冠詞も定形語尾も持たないセルビア語（クロアチア語）は一応いずれにも属さない[3]。例えば「友人」を意味する語では次のようになる（いずれも男性名詞）。

(1)　（現代ギリシア語）φίλος　／　ο φίλος
　　（アルバニア語）　mik　／　miku
　　（ブルガリア語）　приятел ／　приятелът
　　（マケドニア語）　пријател ／　пријателот[4]
　　（ルーマニア語）　prieten　／　prietenul

定形語尾は他の言語にも見られる形態[5]だが、バルカン諸語でもこれもまた、いわゆる「バルカン言語現象」の一つとして、地域類型論の観点から多くの研究が為されている（Comrie 1989: 204-207, Whaley 1997: 13）。

### 1.2. アルバニア語と現代ギリシア語における定形。本論文の目的

この二つのグループが、一方は定冠詞でのみ名詞の定性を表現し、他方は定形語尾でのみこれを示す、というわけではもちろんない。実際には指示代名詞、所有代名詞などいわゆる「冠詞類」との組み合わせによってその表現はより複

雑なものとなり、いずれの言語グループであれ似通った傾向を示すことがある。しかしながら、冠詞が前置されるか後置されるかという決定的な違いによって、言語間の相違もあるのではないだろうか。

そこで本稿では、第二グループに属するアルバニア語の定形表現について、第一グループである現代ギリシア語との対照を交えて、その形式面での異同をいくつか提示してみたい。まず形容詞を含む名詞（句）で定形／不定形が用いられる条件を整理する。次に、両言語間の相違が比較的よく出ている例として、前置詞句と固有名詞における定形の扱いを比較する。最後に、第二グループに属する他言語の例も併せて考察する。

## 2.「形容詞＋名詞」型の名詞句における定形

ここでは、名詞と形容詞、または指示代名詞や所有代名詞との組み合わせによる名詞句における定形の表現について調べる。

### 2.1.現代ギリシア語の場合（Holton et.al.1997: 276-282）

現代ギリシア語では、形容詞、指示代名詞、所有代名詞によって修飾されるいずれの名詞に対しても、定冠詞を伴う例は次の通りになる。

(2) Θέλω την κόκκινη φούστα. [6)]

「（その）赤いスカートが欲しい」［形容詞による修飾］

(3) Ξέλεις αυτό το παιδί ;

「この子を知ってるか？」［指示代名詞による修飾］

(4) Ήρθε ο φίλος της Κατερίνας.

「カテリナの友達（特定の人物）が来た」［属格による修飾］

(5) Ήρθε ο φίλος της.

「彼女の友達（特定の人物）が来た」［所有代名詞による修飾］

これは名詞後方に前置詞句がある場合でもまったく同様である。

(6) Βλέπεις την καρέκλα στη γωνιά ;

「隅にある（あの）椅子が見えるかい？」［前置詞句による修飾］

### 2.2. アルバニア語の場合

アルバニア語の場合はどうなるだろうか。アルバニア語では、指示代名詞は常に名詞に前置される。この時名詞に定形語尾を付加することは通常できない[7)]。

この点はギリシア語の場合と大きく異なる。一方、形容詞や所有代名詞類は通常、名詞に後置される。

(7) Blej këtë fustanellë.
buy-sg.1 this (demonstrativ.) skirt-indef.acc.
「このスカートを買う」［指示代名詞による修飾］

(8) Blej fustanellën e kuq.
buy-sg.1 skirt-def.acc. red
「（その）赤いスカートを買う」［形容詞による修飾］

(9) Kjo është libri im.
this be-sg.3 book-def.nom. my (pers.pron.)
「これは私の本だ」［所有代名詞による修飾］

上の例文の内(8)(9)は、形容詞や所有代名詞を先に出して書き替えることもできる（(7)は不可）。ただしこれは形容詞を強調する文脈である。また形容詞が定形語尾をとる一方で、名詞は定形語尾を失う。つまりスウェーデン語などのように定形語尾が前後で重複することはない [8)]。

(8) 'Blej të kuqen fustanellë.
buy-sg.1 red-def. skirt-indef.acc.

(9)'Kjo është imi libër.
this be-sg.3 my (pers.pron.)-def. book-indef.nom.

こうした形容詞の前方移動に伴う定形語尾の移動は、定形語尾を持つ他のバルカン半島の言語にも見られる。ルーマニア語の例を示す（Lyons 1999: 75）。

(10) cartea bună ／ buna carte 「良い本」
book-def. good-indef. good-def. book-indef.

## 3. 前置詞句における定形

### 3.1. 現代ギリシア語の場合

現代ギリシア語では、前置詞の後に置かれる名詞は定形であることが可能である（Holton et.al.1997: 279, 370ff.）し、むしろ自然でもある。これは名詞が固有名詞（例えば地名）であっても同様である。

(11) Βγήκα από το σπίτι και μπήκα στον κήπο.
「私は家から出て庭へ出た」

(12) Πήγα από την Αθήνα στη Θεσσαλονίκη.
「私はアテネからセサロニキへ行った」

### 3.2. アルバニア語の場合

アルバニア語における「前置詞＋名詞」の構造で現代ギリシア語の場合と明確に異なるのは、修飾語を持たない名詞は定形語尾をとらない、という点である。

(13) Shkojmë në shtëpi.
go-pl.1 to house-indef.
「我々は家に帰る」
(＊shkojmë në shtëpinë.)
def.

(14) Udhëtova me autobus.
travel-aor.sg.1 with/by bus-indef.
「私はバスで旅行した」
(＊Udhëtova me autobusin.)
def.

一方、名詞が後方に形容詞や属格修飾語を持つ場合にはこの限りでない。

(15) Shkojmë në shtepinë e Arbenit.
go-pl.1 to house-def.acc. Arben-gen.
「我々はアルベンの家へ行く」

(16) Udhëtova me autobusin e vjetër.
travel-aor.sg.1 with/by bus-def.acc. old
「私はおんぼろのバスで旅行した」

ただし、主格支配の前置詞だけは常に定形をとる。

(17) Erdhi nga shkolla.
come-aor.sg.3 from school-def.nom.
「彼／彼女は学校から帰ってきた」
(＊Erdhi nga shkollë.)
indef.

## 4. 固有名詞における定形

### 4.1. 現代ギリシア語における固有名詞

現代ギリシア語の固有名詞（人名や地名）はしばしば定冠詞を伴って用いられる[9]。

(18) Ξέρεις τον Πέτρο ;
「ペトロを知っているかい？」

ただしこれが単なる呼称、またはその対象の存在を否定する表現の場合は定冠詞を伴わない。

(19) Δεν ξέρω κανέναν Πέτρο.
「ペトロなんて［いう人は］知らないよ」

(20) Με λένε Πέτρο.
「私［の名前］はペトロと言います」

## 4.2. アルバニア語における固有名詞定形

上に述べた事情はアルバニア語でも概ね通用する（呼称が定形語尾をとらないのも同様だが、この場合は『呼格』に分類される）。

(21) Agimi është djali i mirë.
Agim-def.nom. be-sg.3 fellow-def.nom. good
「アギムはいい奴だ」

(21)' Ai quhet Agim.
he call-pas.sg.3 Agim-indef.
「彼は［名を］アギムという」

（？Ai quhet Agimi）
def.

ただしアルバニア語の固有名詞の場合、語尾の形態によってはこれが適用されず、常に定形をとる例がいくつかある。これは定形を伴わない語尾が弱母音で終わる女性名詞や、形態上女性名詞のように見える外国名（Julieta, Kenia など）に多い（Buchholz/ Fiedler 1987: 237）。

(22) Ajo quhet Zonja.
she call-pas.sg.3 Zonja-def.
「彼女は［名を］ゾニャという」

（？Ajo quhet Zonjë）
indef.

また定形／不定形のいずれをとるかで、ゆれが見られる例もある。これは個

人差や地域差の影響が大きい。おそらくギリシア語でも同様の例があるのではないかと考えられる。

(23) Ku　　është　　Hysen　　/　Hyseni(Hysni)?
　where be-sg.3　(indef.)　　(def.)
「ヒュセン／ヒュセニ（ヒュスニとも）はどこ？」

一方「前置詞＋地名」においても（後方からの限定がない限り）定形語尾をとらない。

(24) Shkojmë　për　Durrës.
　go-pl.1　for　Durres-indef.
「我々はドゥラスへ行く」
（＊Shkojmë për Durrsin.）
　　def.

(25) Kam qënë　　në　Britaninë　e Madhe.
　be-perfect.sg.3　in　Britain-def.　Great
「私はイギリスにいたことがある」

もっとも、これはむしろ 3.2.で述べた条件が適用されていると考えた方が無理がないだろう。

## 5. 考察

### 5.1. 定形の一般的な意味と機能

ごく基本的には、アルバニア語の定形語尾も現代ギリシア語の定冠詞も、「定」のマーカーとして名詞に付加されるものであり、その欠如が名詞の「不定」や「不特定」を示す点もまた同様である（Buchholz/ Fiedler 1987: 232-241）。これは、一般に説明されている冠詞の機能と際立って異なるものではない。

例えばドイツ語の定冠詞については、その機能を(1) 指示力のない指示詞「外的な形容規定 Heterocharakterismus」（Das Pferd ist nicht da.『その（ある種の）馬はいない』）、(2)通念「内的な形容規定 Autocharakterismus」（Der Mensch ist sterblich.『人間（というある種のもの）は死ぬ』）、そして(3)形式的定冠詞（um die Wette『競って』などの句）に分類する見解がある（関口 1953: 2f. また 1954: 405）[10]。こうした分類はバルカン諸語の名詞定形の用法を説明するにも有用であると考えられるが、その可能性については意味論の観点から別途に論じる必要があるだろう。

## 5.2. 本論文のまとめ

さて、本論文ではアルバニア語の「名詞＋定形語尾」という形式に着目して、ギリシア語定冠詞との対照を行った。

アルバニア語の名詞では、複数形の属格／与格／奪格における語尾-ve は定形・不定形で同一であり、「定」を明示する要素はあらわれない（Buchholz/ Fiedler 1987: 212ff.）[11]。もちろんこれは形態面で同じであるというだけで、実際の発話では前後関係から定／不定を概ね判別し得るのだが、定冠詞の有無によってこの差異を示す現代ギリシア語や、アルバニア語同様に語尾定冠詞をとるが、属格／与格／奪格の定形語尾-lui または-lor を持つ（つまり不定でないことが明示される）ルーマニア語とはやや事情が異なっている。また前置詞を伴う対格が（修飾語がなければ）定形語尾をとらないという点も、ギリシア語の場合とはむしろ正反対である。

上にあげた条件に限って見れば、アルバニア語における定形語尾の使用範囲は現代ギリシア語（やルーマニア語）よりも狭く、また形態面での判別が曖昧な場合も多いと言えるだろう。

しかしながら一方で、人名・地名などの固有名詞が定形を伴った状態で好んで使用される傾向は、名詞に定冠詞を前置する現代ギリシア語よりも強い。もちろん、こうしたことは定形語尾を持つ他の言語にも見られないことではない。実際、ルーマニア語の人名表記には似たような事情がある。ただ現代ルーマニア語では家族名の定形が用いられない傾向にある[12]という指摘があり、またブルガリアやマケドニアの人名は定形をとらないのが普通である。しかもアルバニア語の固有名詞における定形の選択には、しばしば名詞の形態や音韻に関わる条件があると考えられる。バルカン諸言語内で定形語尾をとるグループの中でも、アルバニア語の固有名詞と定形の関係には、独特の傾向が存在すると言えよう。

### 註

1) 本論文で問題として取り扱う「定形」とは、あくまでも名詞に何らかの要素が付加された形式のことであり、語が特定の文脈内で含意する「定性（definiteness）」や「特定性（specificity）」を指すわけでは必ずしもない。

従って、不定冠詞をとるが前後関係から特定のものを指していると判断される例（例えば　Αυτό το έργο θυμίζει ένα ντοκιμαντέρ που είδα πέρσι.『これは

昨年見たあるドキュメンタリーの再編集版だ』　とか　Βρήκα ένα ρολόι.『（誰かが忘れていった一つの）時計を見つけた』）（Holton et.al.1997: 284）を特に考察対象としているわけではない。

2)「定形語尾」の他に「結合冠詞（bound article）」（Lyons 1999: 68ff.）、また名詞に「前置」する通常の冠詞類と対比させる意味で「後置定冠詞」（postposed article）など様々な呼び方があるが、本稿では主に「定形語尾」の語を用いる。またこの定形語尾を伴った名詞の形を単に「定形」（definite form）と呼ぶ。その意味については註 1) に述べた通りである。

3) もちろんセルビア語にも、指示代名詞との組み合わせや、形容詞（男性形）の限定用法（例；glavni grad『（唯一の）首都』　glavan grad『主な都市』）があるので、「定」を表す方法がないわけではないが、ここでは取り上げない。

4) マケドニア語の場合は指示対象の遠近により「-ов 型」「-он 型」「-от 型」の三種類があるが、定形語尾として最も普通に用いられるのは「-от 型」なので、これを例とする。

5) 印欧語では例えばスウェーデン語やノルウェー語、デンマーク語、アイスランド語などがあげられる。

ただしアイスランド語では「形容詞＋名詞」の句の場合、定形語尾の形態がそのまま形容詞の前に置かれる（báture*inn*『（その）舟』　*hinn* fallegi bátur『（その）美しい舟』）。またスウェーデン語では同様の条件で名詞定形もそのまま残す例がある（rasa*n*『（その）旅』　*den* långa rasa*n*『（その）長い旅』）。従ってこれらの言語の定形表現を「自由型」と呼ぶことがある（Lyons 1999: 77-78）。

6) 例文(2)の定冠詞 την を不定冠詞の女性形 μια にそのまま書き替えれば次のようになる。他の例文も同様である（Holton et.al.1997: 277）。

(2)' Θέλω μια κόκκινη φούστα.「赤いスカートが（一つ）欲しい」

7) ただし、更に後方から修飾語による限定を受けた場合はこの限りでない。

Këto　vajzat　　e Agimit
these daughters-def.　Agim-gen.
「アギムのこの娘たち」
(＊Këto　vajza　　e Agimit
these　daughters-indef.　Agim-gen.)

8) 註 5)を参照のこと。

9) こうした表現は、イタリア語でよく知られている。また同じロマンス語ではカタルーニャ語も同様だが、スペイン語（カスティーリャ語）にこうした傾向は見られない（伊藤 1993）。

La Maria és catalana i en Carles és també català .（カタルーニャ語）
María es catalana y Carlos es también catalán.　（カスティーリャ語）
「マリアはカタルーニャ人で、カルロスもカタルーニャ人だ」

10) この考え方を進めると、無冠詞の表現には「本来冠置されるべき冠詞がないことによって生ずる唐突性」があるという（『ドイツ言語学辞典』1994: 81）。例えば註 1) の例文を書き替えた Επιτέλους βρήκα ρολόι. は「（時計を持っていなかったので、とにかく何か）時計を手に入れた」となる。この時計は特定のものを指しているわけでもないが、かといって「時計」というものを総称しているわけでもない。
11) 規範文法では複数奪格の不定形語尾として-sh が存在する。しかし現実のアルバニア語ではこれも-ve に置き換えられることが多い。
12) 例えば Ion Mureşanu に対して Ion Mureşan も許容されるという（Beyrer/ Bochmann/ Bronsert 1987: 91）。

## 参考文献


Beyrer, Arthur / Bochmann, Klaus / Bronsert, Siegfried (1987). *Grammatik der rumänischen Sprache der Gegenwart.* Leipzig: Verlag Enzyklopä die.

Buchholz, Oda / Fiedler, Wilfried (1987). *Albanische Grammatik.* Leipzig: Verlag Enzyklopädie.

Buĭgar, Gheorghe (1995). *Limba română* Bucureşti: Editura Vox.

Comrie, Bernard (1989). *Language universals and linguistic typology.* Oxford: Blackwell.

Demiraj, Shaban (1985). *Gramatikë historike e gjuhës shqipe.* Tiranë : 8 Nëntori.

Demiraj, Shaban (1993). *Historische Grammatik der albanischen Sprache.* Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften.

Domi, Mahir (1995). *Gramatika e gjuhës shqipe,* Vol.1. Tiranë.

Domi, Mahir (1997). *Gramatika e gjuhës shqipe,* Vol.2. Tiranë.

Givón, Talmy (1984). *Syntax. A functional-typological introduction,* Vol.1.

Amsterdam/ Philadelphia: J.Benjamins.
Haspelmath, Martin (1997). *Indefinite Pronouns*. Oxford: Clarendon Press.
Holton, David / Mackridge, Peter / Philippaki-Warburton, Irene (1997). *Greek. A comprehensive grammar of the modern language.* London/ NY: Routledge.
Lyons, Christopher (1999). *Definiteness*. Cambridge: Cambridge Univ.Press.
Mackridge, Peter (1985). *The Modern Greek Language*. Oxford: Oxford Univ.Press.
Newmark, Leonard / Haznedari, Ismail / Hubbard, Philip / Prifti, Peter (1980). *Spoken Albanian.* Ithaca: Spoken Language Services.
van Valin, Robert / Lapolla, Randy J. (1997). *Syntax. Structure, meaning and function.* Cambridge: Cambridge Univ.Press
Whaley, Lindsay J. (1997). *Introduction to typology. The unity and diversity of language.* Thousand Oaks/ London/ New Delhi: SAGE Publications.
伊藤太吾（1993）『スペイン語からカタルーニア語へ』　東京：大学書林
関口存男（1953, 1954, 1955）『冠詞－意味形態的背景より見たるドイツ語冠詞の研究』（全３巻）　東京：三修社
『ドイツ言語学辞典』(1994)　東京：紀伊國屋書店

# Zu Funktionen der "determinierten" Form des albanischen Nomens
## im Vergleich mit dem Neugriechischen

IURA Ichiro

Das albanische Substantiv tritt im allgemeinen in der bestimmten Form auf, wenn Determiniertheit vorliegt, d.h. die Setzung des nachgestellten Artikels (z.B. mik-u) signalisiert Determiniertheit. Andererseits tritt das Substantiv in der unbestimmten Form auf, wenn Indeterminiertheit vorliegt, d.h. das Fehlen des nachgestellten Artikels signalisiert Indeterminiertheit. Die gleiche Regel haben wir, im Prinzip, beim Neugriechischen Substantiv mit/ohne Artikel.

Im Albanischen, obwohl Determiniertheit vorliegt, kann das Substantiv häufig beim Gebrauch einiger Kasus (Präp.+Akk., Vok., Abl. als Ortsnamen) ohne nachgestellten Artikel auftreten.

Im Genitiv, Dativ oder Ablativ Plural (in der albanischen Gegenwartsprache findet man keinen Unterschied der bestimmten/unbestimmten Formen) tritt das Substantiv stets ohne nachgestellten Artikel auf, wobei Determiniertheit oder Indeterminiertheit vorliegen kann. In dengleichen Kasus im Neugriechischen ist die Substantivform zwischen Determiniertheit und Indeterminiertheit durch die Setzung/das Fehlen des Artikels immer klar differenziert.

Unter den obenerwähnten Bedingungen ist die Gebrauchshäufigkeit der Determiniertheitsform im Albanischen, im Vergleich mit dem Neugriechischen, relativ beschränkt.

Auf der anderen Seite tritt das albanische Substantiv eher mit dem nachgestellten Artikel als das Neugriechische auf, z.B. bei der Verwendung einiger Eigen- oder Ortsnamen (u.a. weiblich; Drit-ë /Drit-a), deren Auslaut mit dem nachgestellten Artikel gleich klingt und deren unbestimmte Form nicht von der bestimmten unterschieden werden kann. Im Albanischen, im Vergleich mit dem Neugriechischen (möglicherweise auch mit anderen Sprachen, bei denen "vorgestellte" Artikel vorliegen), wird die determinierte Form benötigt, nicht nur aus semantischen Gründen, sondern auch häufig um die morphophonologische Deutlichkeit des Substantivs zu zeigen.